

「解放の学力」論を考案した中村 拡三(なか
むら・こうぞう, 1923-2002)の教養
—和歌山県新宮市と奈良県吉野郡の
教育に関する文章から考える—

岡本 洋之(兵庫大学)

2018年度 東北アジア文化学会秋季国際学術大会発表
(於・韓国光州広域市 亜細亜文化院)

2018/10/27

1. 本研究の目的と方法

中村拓三は、戦後日本の同和・解放教育における理論的指導者の一人であり、「解放の学力」論を考案した人である。

この教育は、集団主義教育を基調として、差別のために「荒れた」子どもの生活を正し、就職・結婚等の際に直面する差別をはじめ、貧困、家庭内暴力等の問題の根源が差別に由来することを自覚させ、子どもたちを差別と闘うよう立ち上がらせていくものであった。

(解放教育の実践の一事例)

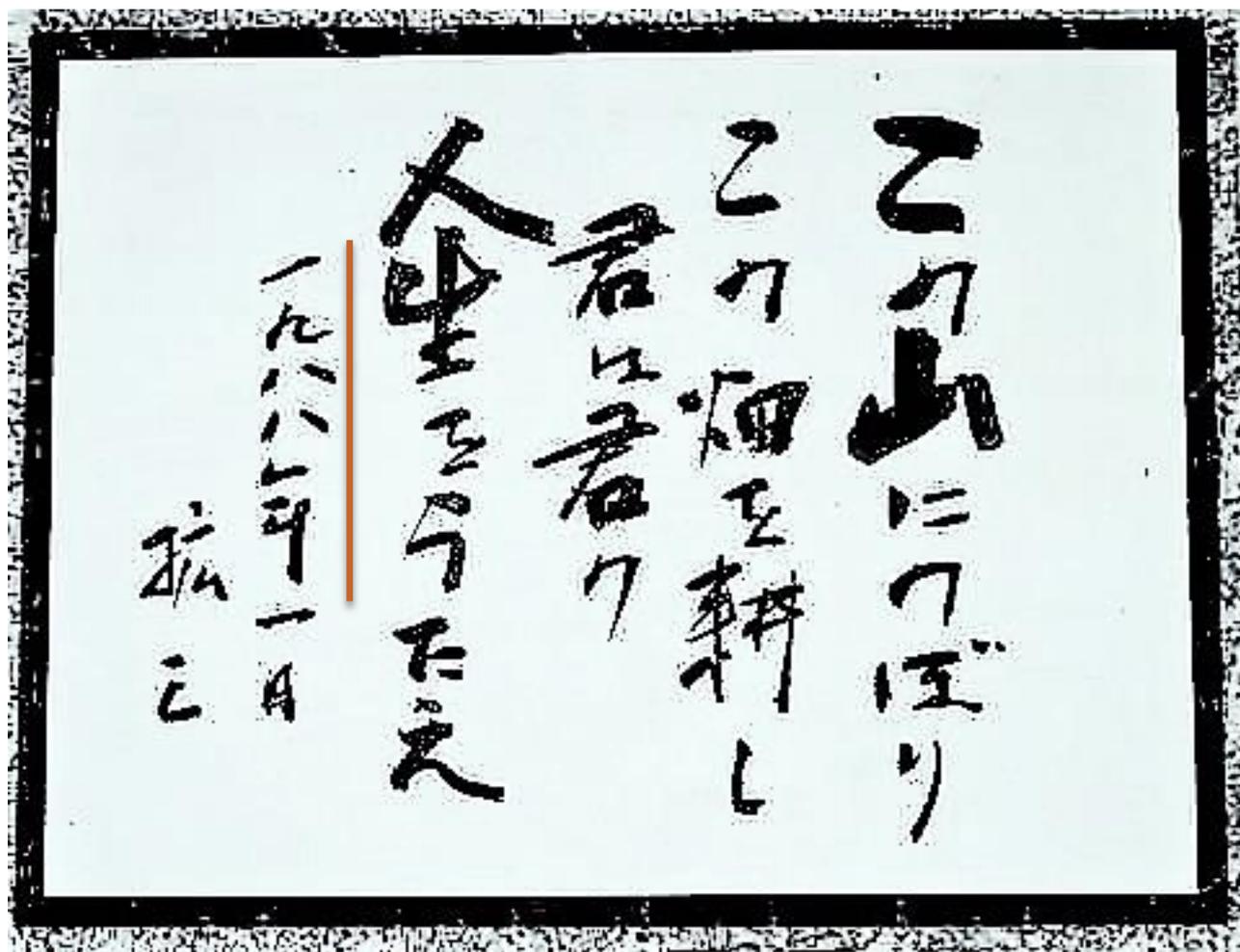
「指導し切らんで、ヤクザになったもんもおったけど、ワシらも必死やった。タバコでも、自販機ごとパクってくる奴もおった。それで指導のために家に乗り込んだら、二階の衣装棚の中に隠れとる。親も手がつけられんくらいのワルや。この時の教頭も大した奴で、その生徒を二階の階段から背中押してダダダッと落としておいて、その上から飛び蹴りして叩きのめした。えらい騒ぎやったから、近所の人らもびっくりして『あんたら何ですのんッ』て文句言うてきたから『すんまへん、こいつの身内ですねん』って言うて切り抜けた。今やったらもちろん大問題やけど、これはその生徒の生活を知ってるからできたことや。本来やったら警察に電話すれば済むことかもしれんけど、警察には電話せん。家庭も荒れとるから、鑑別所いつでも更生なんかでけへん」

(1980年代に大阪府松原市立松原第三中学校長を務めた北山貞夫の話。上原, 2014年, 74-75頁)

このような実態のもとでは、一人ひとりの子どもたちに多様な進路・人生設計を認め、それをかなえるように指導することなど、遠い先の話だと考えられたことであろう。

しかし発表者は、同和・解放教育指導者のなかでは中村拡三が、状況が許すようになれば子どもたちに多様な人生設計をさせ、個性を伸ばしたいと考えていたのではないか、という仮説をもっている。

10/2018 OKAMOTO H



中村が晩年に現・兵庫県宍粟市に開いた合宿施設
「奥海(おねみ)生活学校」に掲げた額

<http://kobe-kodomo.jugem.jp/?day=20110814> (2018/10/25確認)

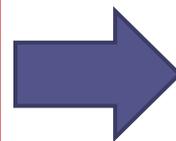
またその基盤として、大正デモクラシー期に彼の故郷・長野県で花開いた、教養を楽しむ風潮があったのではないかと発表者は考えている。

本発表は、レッド・ページによって長野県の教職を追われ、関西地方に流れてきていた彼が、1955(昭和30)年ころ、単に社会的・経済的差別の撤廃を目指すだけでなく、教養としての知をもとめようと努めていたこと、そしてその姿勢から、社会に対する彼の姿勢を読み取ることを目的とする。方法としては、このころの社会情勢の動きをふまえ、彼の文章を読み解く。

2.中村に関する先行研究と本研究の関連 板山(2013年)によると…

10/2018 OKAMOTO H

1950年代
学校教育による
「部落／部落外」双方の
子どもの変革



1960年代
学校外の部落の子どもの
運動体である「子ども
会」を基盤とした、
部落の子どもの「解放の
主体形成」

両期間を通じ…

- (1)生活綴方的教育によって子どもたちに生活実態を見つめさせ、そこから社会矛盾に気づかせる(解放の自覚)。
- (2)狭い個人・人間関係レベルの問題を、広い社会関係の問題へとつなぐ意味で「社会関係のあり方や自然の法則を身につける教育」を行う(教科指導)。
- (3)部落の子どもがもつ、社会の不正に対する「抵抗感」(中村の造語)に共感した部落外の子どもの差別意識を克服し、両者が集団の中で生活そのものを高めていくような教育を行う(集団づくり)。

1950年代
学校教育による
「部落／部落外」双方の
子どもの変革

本研究ではこれと、中村が一貫して追求した解放の自覚・教科指導・集団づくりという3つのポイントが、1955(昭和30)年に中村らが和歌山県新宮市で行った被差別部落の調査と、奈良県吉野郡における教員生活に大きく影響されて形成されたのではないかという問いを立て、

両地域における戦後経済の動き、とくに林業を取り巻く環境の変化をふまえてそれを解きたい。

3.安易に将来の展望を見出せない地に身を置いた中村 a. 和歌山県新宮市での被差別部落の調査



新宮市

<https://minkara.carview.co.jp/userid/1995869/blog/c923332/>
(2018/10/25確認)

1955(昭和30)年に中村は部落問題研究所の一員として、新宮市の被差別部落と教育の実態に関する調査を行った。この調査では、

- ・多くの家庭の経済的貧困、
- ・そのなかで子どもたちが市内の製材所に木くずを拾いに行く「薪集め」のため登校できない現実、
- ・経済的・時間的余裕がない親の生活からくる家庭内での不和と暴力、
- ・親が家を空けている間に子どもが集団をつくって街を徘徊する現実等

が明らかになった。

また子どもたちの作文からは、「学習に不熱心な子どもでも、[親に対し]内部にもえるような怒りをもっている」ことが明らかになった。

「多くの子どもたちは、貧困のために薪をぬすみにゆき、また家庭が破壊されているなかで、その人間性をすっかり歪められてきている。だがそれにも屈せずのにびている子どもたちがいることも事実である。その家庭は、いわば『教育に理解のある家庭』であるが、この理解というものは何であるのか」。

中村らはこれを討議した結果、望ましい親の生き方は「子どもと共に悩み、語り、共にのびようとする」ものであり、それが子どもたちの怒りを「社会に対する批判と抵抗として育ててゆく」のだと小括し、そこから「何よりも正しい解放運動をすすめなければならないであろう。解放運動とは、ゆがめられた社会関係に対する抵抗以外の何物でもないからであり、それは当然、親たち自身の間変革をともしないではない。この解放運動＝人間変革が一方では、子どもたちの教育を前進させ、他方では、子どもたちに学用品を与え、教科書を与え、やがて、子どもたちの薪拾いをも解決してゆく道である」という結論に達する。

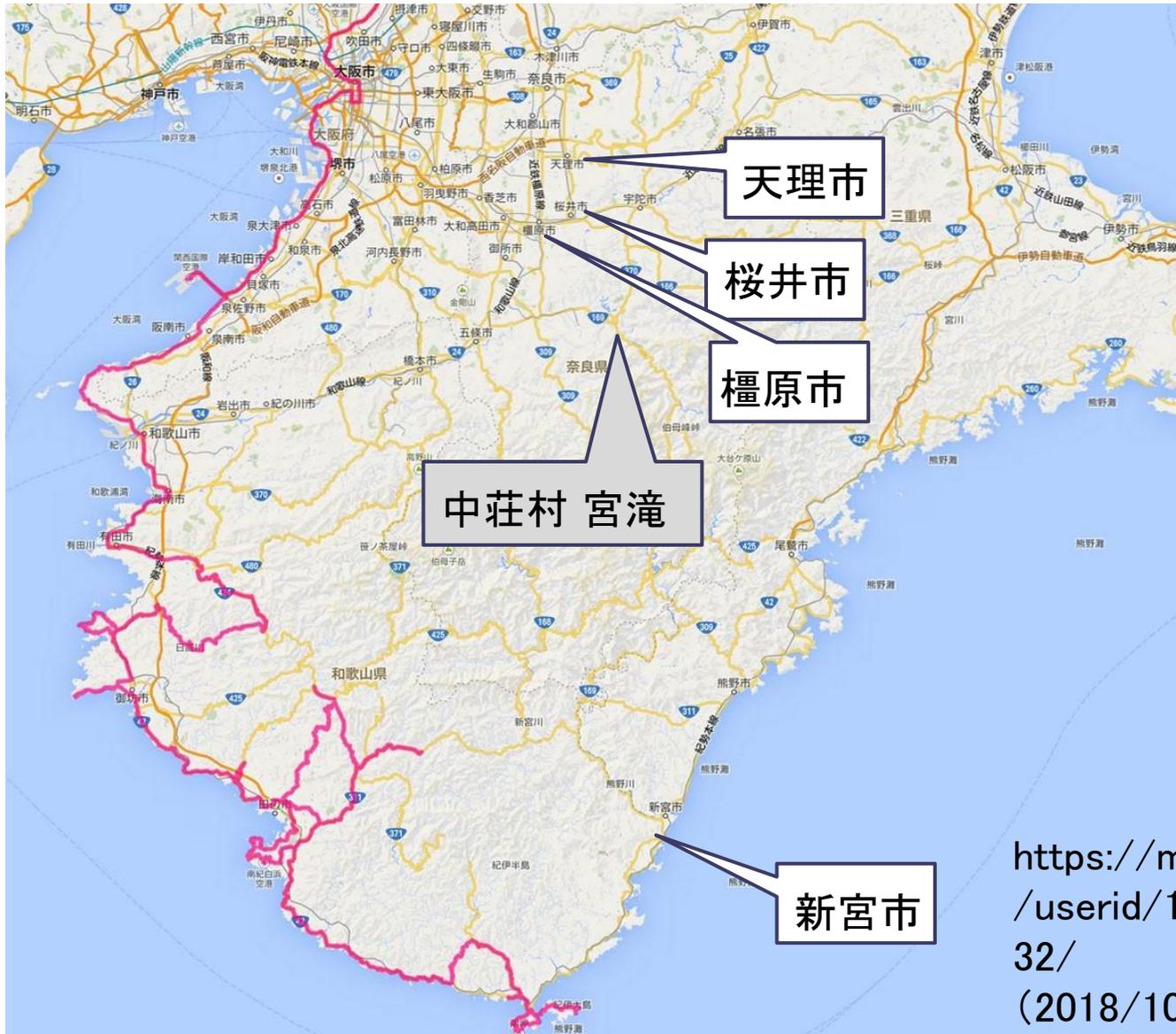
このように「正しい解放運動を」という結論が出たにもかかわらず、それをまとめる文章「同和教育のゆきづまりは何か—新宮の調査から学ぶこと—」を、中村は運動に結集せよというプロパガンダにしていない。

まず冒頭の章「新宮というところ」では、かつて木材の一大集積地として新宮市の果たした役割が、1952-54(昭和27-29)年に急速に衰退していることが、新聞記事から統計を引用して丁寧に示され、この役割が奈良県吉野川流域に奪われていると述べられている。あわせて、かつて当地の人々が「関西の江戸っ子」と呼ばれたことや、戦前に熊野川の筏師たちが鴨緑江にまで遠征したことにも触れられているのは、さながら教養講座のようである。

次節「部落のすがた」では、最初の文中に「約二〇〇戸に及ぶこの未解放部落は、木材とは、直接関係がなかった。いや、木材からは、はねのけられていたという方が正しいかもしれない」とされ、「新宮市に集まる木材の減少は、山林労働者、いかだ師の仕事を極度にきりつめ、そこからあふれた労働者が、これまで部落の主業であった土木労働にくいこんできた」と要点を突いた説明がされているため、一見すると、文章をこの節から始めても文脈は成り立つ。

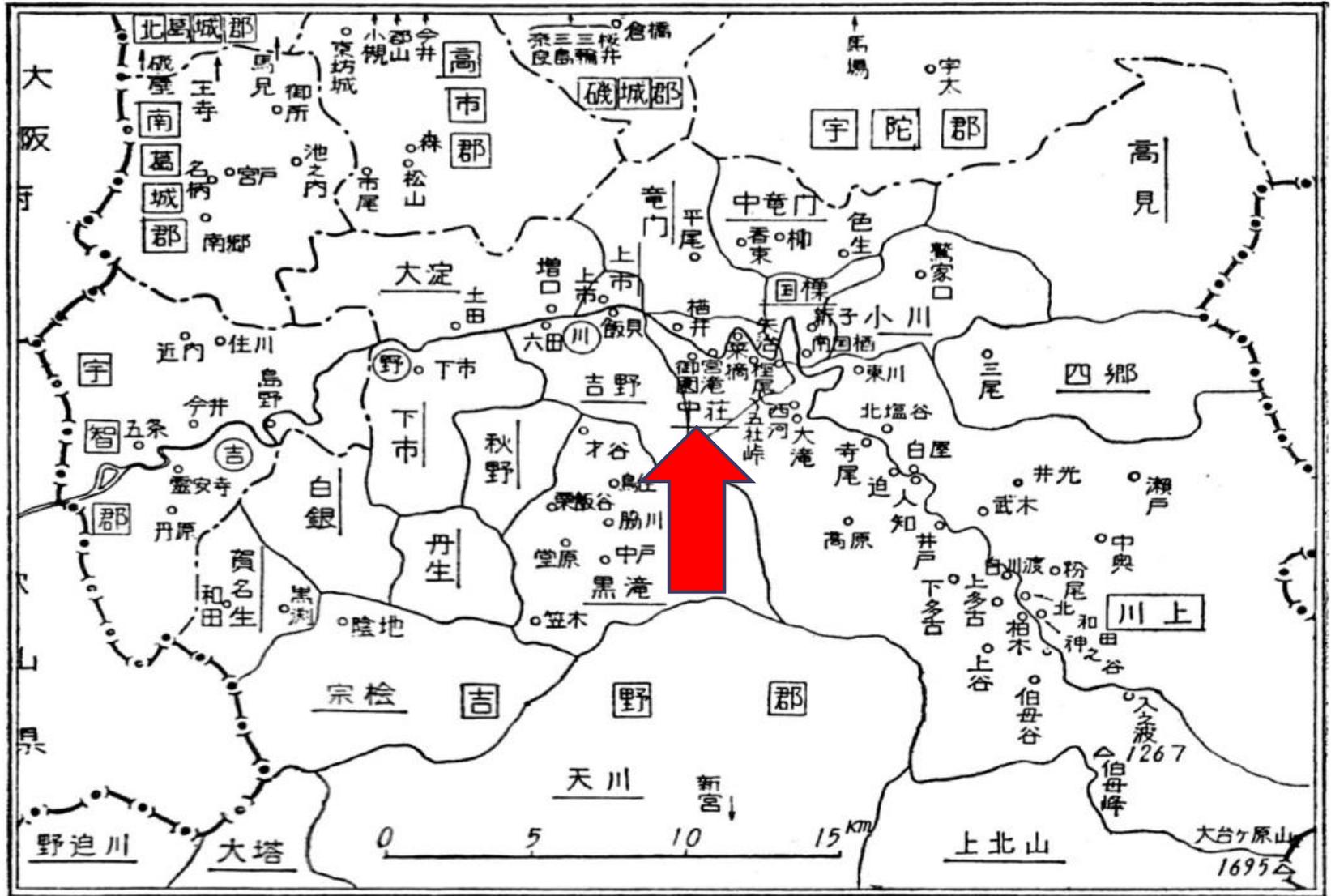
つまり、中村が「前途の暗い新宮」を冒頭の節で書いたことは、文章を書き出しからやや重くしている(以上、中村、1973年、93-109頁)。そこには読者に対し、被差別部落を含む新宮市全体に将来への展望が見えないのだから、ただ解放運動に結集しさえすればよいという単純化された結論に満足するわけにはいかないという中村のメッセージが込められているように思われる。

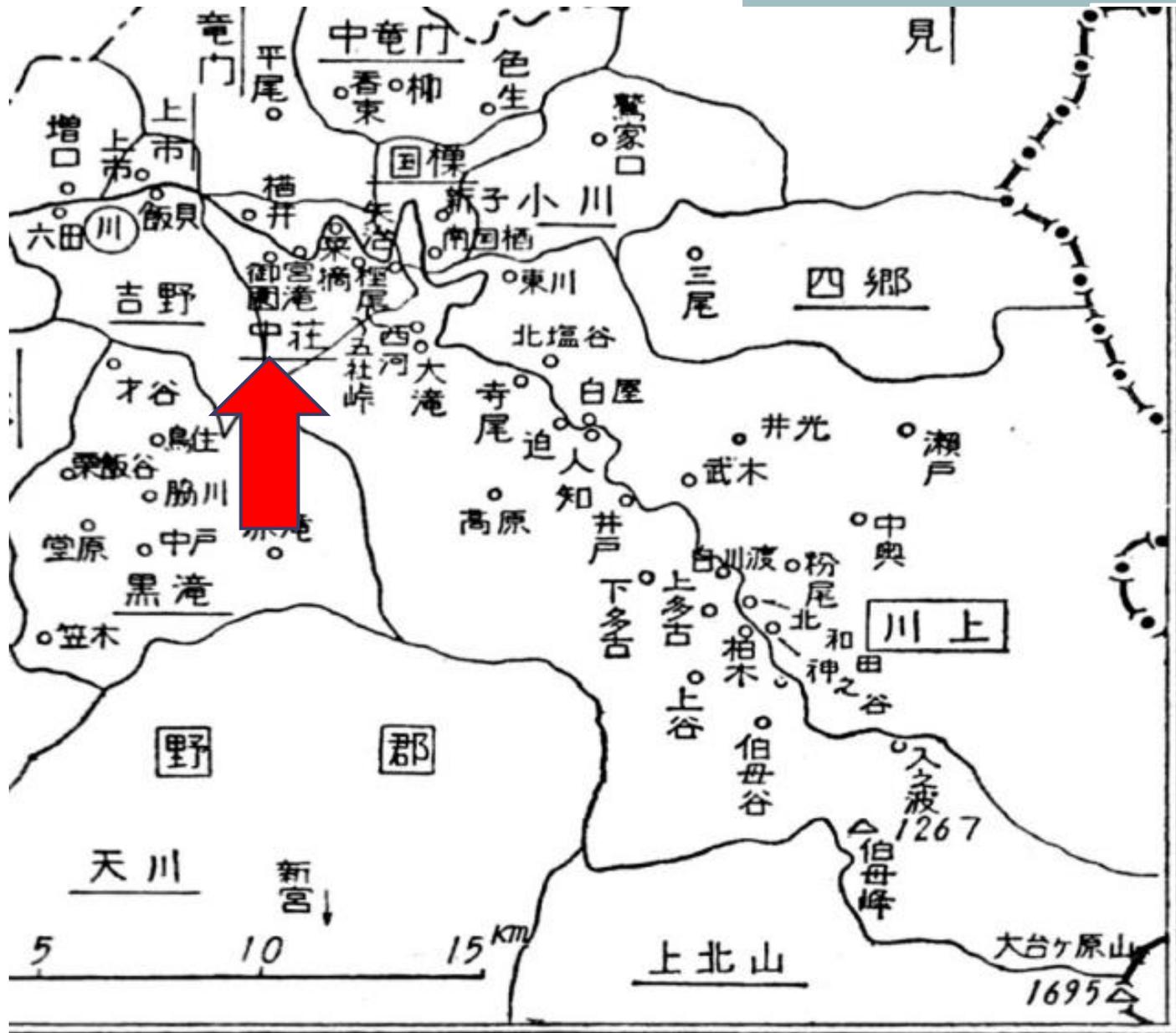
b. 教員として赴任した奈良県吉野郡の実情



<https://minkara.carview.co.jp/userid/1995869/blog/c923332/>
(2018/10/25確認)

奈良県吉野川流域図





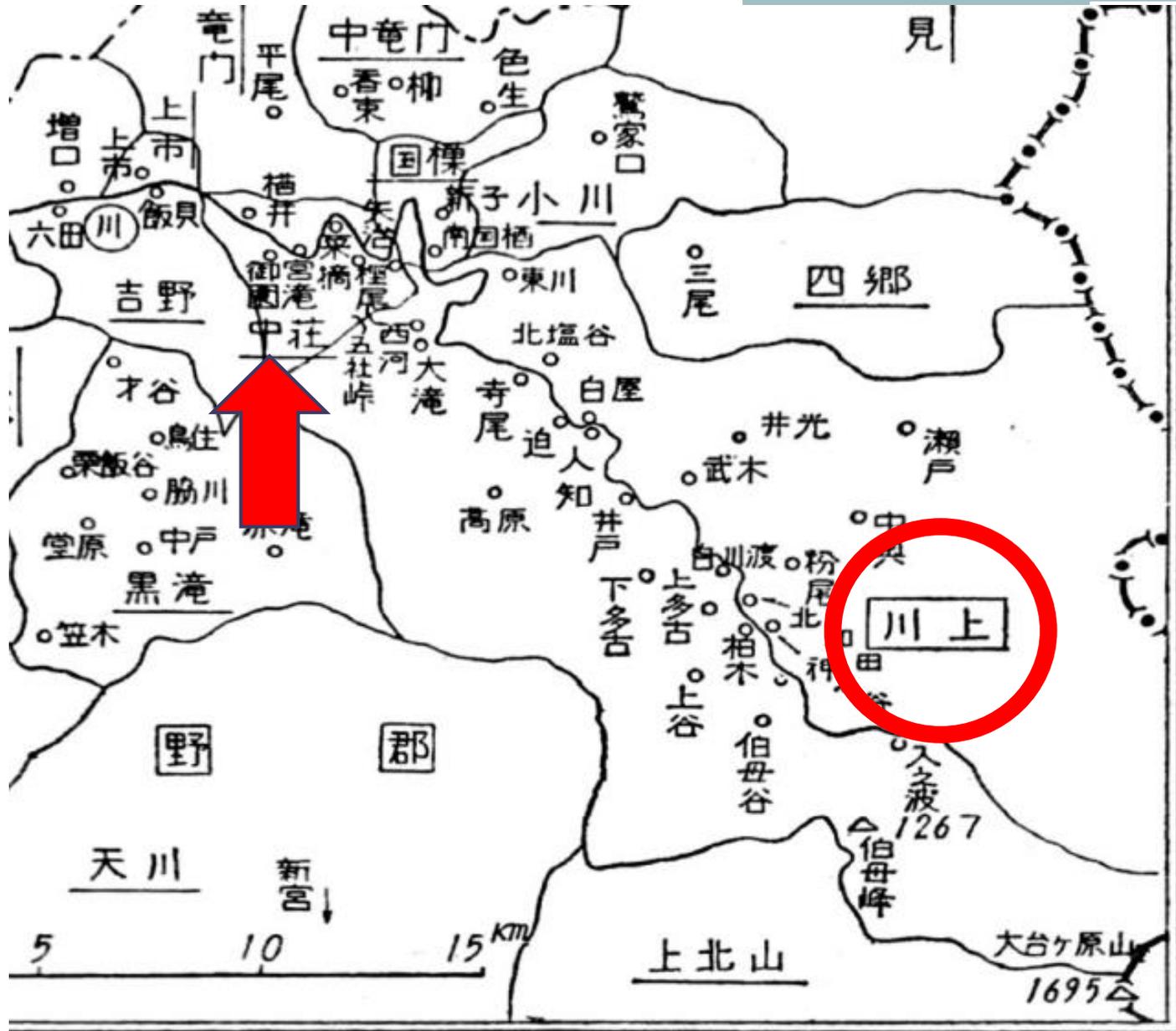
中村ら部落問題研究所員が新宮市で調査を行った直後、同研究所内では日本共産党員登録をしていた者と、そうでない中村らとの間に確執が生じ(平野, 2002年12月, 65-66頁), 彼は研究所を去り, 同じ1955(昭和30)年の11月から奈良県吉野郡中荘村宮滝(現・吉野町)の中荘小学校で教壇に立った。

このころは, 紀伊半島木材の取引の場について, 桜井市場(奈良県桜井・橿原・天理市)が新宮市場に対して圧倒的な優位を占めるに至ったばかりでなく, 木材の運搬手段はトラックとなり, 従来の筏流しは完全にすたれたところである。

中荘小の校区に被差別部落はなかったが、そこは貧しい家庭の多い山村であった(中村, 1975年, 464頁)。教室内はケンカが絶えず、一方で元気がない子どももいる。毎日家庭訪問をして保護者とコミュニケーションをとるなかで、「問題はやはり彼らの生活そのものにある。[中略]加えて、親たちの性格、意識にまでも関係している」(同書, 30頁)と気づいた中村は、生活綴方を採り入れる。彼は、家庭の様子も含めて子どもたちに日記を書かせ、そのわずかな一言にもコメントを書き、また家庭訪問を頻繁に行った。

ところで、中荘村に隣接する吉野川上流の川上村では、川上村山林労働組合が労働市場の変化に対応して、道路工事への組合員就労や函館宮林署国有林への労働力移出等を行って組合員の生活を守るよう努めたほか、争議をも頻発させていた。組合員数は1954(昭和29)年以後増加しつつあり、やがて1958(昭和33)年にピークを迎えることになる(半田良一・山田良治, 1979年, 139, 147-148頁)。

貧しく沈滞した中荘村宮滝と、労組が懸命に動いて村在住の労働者の生活を守ろうとする川上村の様子は、あまりにも対照的である。なぜこのように異なっていたのか？



時期をさかのぼって吉野川の筏流しが盛んであったころ、多くの筏が宮滝を通過していったなかで、山林王と呼ばれた北村家の筏は、奥郷（吉野川本支流の最上流をいう）から宮滝まで来るといったんそこに係留されたのち、下流の上市から来て交代した筏師（筏士）が再び和歌山方面に流して行ったのである（谷，1972年，515頁）。

つまり宮滝の地は、北村家の筏師の中継地として、金遣いが荒かった彼らが上得意として金を落とす土地であった。



①は中村が勤務していた中荘小。現在は廃止され、吉野宮滝野外学校となっている。

10/2018 OKAMOTO H



吉野宮滝野外学校の眼下を流れる吉野川。この上流と下流すぐの所に難所があるため、ここくらいしか筏を係留できる所はないと思われる。2018/10/21岡本撮影

10/2018 OKAMOTO H

労働運動を展開できた川上村の山林労働者とは異なり、北村家と労使関係になかった宮滝の住民たちは、生活を守ろうにも闘いようがなかった。中村が赴任したのはこうして寂れてしまった宮滝の地であり、彼はこのように絶望的な状況におかれた住民と子どもたちを前にして、生活綴方と家庭訪問を軸とする孤軍奮闘の教育実践を展開したのである。



吉野宮滝野外学校
(旧・中荘小)
2018/10/21岡本撮影

4. おわりに —教条に満足して思考停止することのない中村—

本研究においては、1950年代に中村が目指した、学校教育による「部落／部落外」双方の子どもの変革と、彼が1950-60年代を通じ一貫して追求した解放の自覚・教科指導・集団づくりという3つのポイントが、1955(昭和30)年に中村らが和歌山県新宮市で行った被差別部落の調査と、奈良県吉野郡における教員生活に大きく影響されて形成されたのではないかという問いを立てた。

その結果、日本が高度成長に向かうなかで、筏流しからトラック輸送へと木材運搬方法が変わるにつれ、生じた失業者が職を求めて被差別部落住民の生業を脅かした新宮市と、顧客たる筏士を失って経済的困窮に陥った吉野郡中荘村の両方を、中村が相次いで見つめる立場にいたことを見出せた。

新宮で中村は、正しい解放運動こそ必要という方向性を見出しながらも、市全体が経済成長から取り残されていたため、未来への明るい展望を描くどころではなかった。中荘村でも、同じく経済成長から取り残された村民の、隣村と違って生活をよくするために闘おうにも闘う相手がいないという絶望状態を中村は見た。彼はこのように、八方ふさがりの人々がおかれた厳しい状況をよく知っていたからこそ、「正しい解放運動が必要」という方向性を出せても、そのことに満足して思考停止することなく、中荘小で生活綴方の実践を通じて子どもたちに社会に目を向けさせようと努め、これからのちも同和・解放教育の担い手として歩み続けていくのであろう。

発表者は、まだここまでしか考えられていない。おそらく中村は、部落問題研究所を追われたこと、寂れた中荘村での実践、そこで迎えた教え子の事故死などにより、泣きたくなるほどの無力感を味わっていたのではないか。それにもかかわらず彼が挫折しなかったのはなぜか？

やはりそこには知の力があつたのではないかと推理せざるを得ない。ファシズム期にさえも「哲学を勉強しなければ一人前の教員ではない、というような気風があつた」(赤羽, 1974年, 48頁)という長野県で彼が生まれ育ち, 師範学校で学び, 最初に教員生活を送つたこと, および部落問題研究所で奈良本辰也, 原田伴彦, 山岡亮一, 上田一雄, 領家穰らから, 歴史学, 農業経済学, 社会学の研究訓練を受け, あるいは親しく交わり, そうして教養を積んだことが関係しているのではないか。この点を明らかにすることが課題として残っている。

引用・参考文献

10/2018 OKAMOTO H

- 赤羽七郎治(1974年)「教員生活断章」,『塩筑教育』第3号,東筑摩塩尻教育会,47-50頁,塩尻市立図書館蔵。
- 板山勝樹(2013年)「中村拓三の『解放の学力』論成立に関する一考察」,『部落解放研究』,部落解放・人権研究所,第199号,85-96頁。
- 上原善広(2014年)『差別と教育と私』,文藝春秋。
- 笠井恭悦(1964年)『近代土地制度史研究叢書第三巻 林野制度の発展と山村経済』,御茶の水書房。
- 谷弥兵衛(1972年)「筏流しについて」,吉野町史編集委員会編(1972年),514-521頁。
- 中村拓三(1973年)『解放教育著作集第3巻 解放教育と集団主義』,明治図書出版。
———(1975年)『解放教育著作集第1巻 部落解放と教育実践』,同社。
- 半田良一編著(1979年)『日本の林業問題—紀伊半島における林業の展開構造—』,ミネルヴァ書房。
———・山田良治(1979年)「吉野林業における労働問題」,半田良一編著(1979年),132-157頁。
- 平野一郎(2002年12月)「中村かくさんのこと(私記)」,解放教育研究所編『解放教育』第420号,明治図書出版,65-67頁。
- 吉野町史編集委員会編(1972年)『吉野町史上巻』,吉野町役場。